

## 耳聾について

吉岡 広記

日本鍼灸研究会

【緒言】「耳聾」は、『説文』耳部に「聾，無聞也」とあるように、耳が聞こえない様を言う。医書では、『靈枢』刺節真邪に「夫発聾者，耳無所聞，目無所見」とあるように、「発聾」，「耳無所聞」とも記される。古くは馬王堆出土の『足臂十一脈灸経』（以下『足臂』と略す）では足少陽脈と手少陽脈の病として、また同所出土の『陰陽十一脈灸経』（以下『陰陽』と略す）並びに張家山出土の『脈書』では足太陽脈（鉅陽脈，『靈枢』経脈は手太陽脈）の所生病，手少陽脈（耳脈）の是動病・所生病として、それぞれ考えられていた。すでに戦国末頃には一定しない「聾」の認識は、後漢代にはさらに様々な見解が打ち出され、複雑な様相を呈す。『素問』，『靈枢』，『明堂』（『甲乙経』）の記述から変遷を追った。

## 【『素問』『靈枢』（運氣七篇は除外）】

『素問』は五蔵生成（以下S10と略す。『素問』第十篇を示す。諸篇もこれに倣う）、診要経終論（S17）、蔵気法時論（S22）、通評虚実論（S28）、熱論（S31）、刺熱（S32）、厥論（S45）、脈解（S49）、刺禁論（S52）、繆刺論（S63）の10篇、『靈枢』は終始（L9）、経脈（L10）、寒熱病（L21）、熱病（L23）、厥病（L24）、雜病（L26）、決気（L30）、刺節真邪（L75）の8篇に見える。①病に深さ（所在）という観点が加わり、経脈だけでなく五蔵の病として設定される。経脈は、足少陰（S32，L23）、足厥陰（S10）、足陽明（L26）、足少陽（S10，S17，S31，S45，L26）、足太陽（S49）、手陽明（S63：絡，L10：別）、手太陽（S45，L10）、手少陽（L10，L21）の8脈と増え、陰陽では陽脈が、手足では足が多く、足少陽脈が最多である。五蔵は肝（S10，S22）、肺（S22）、腎（S32：骨，L23：髓，L30：精）の3蔵であるが、その中には経脈から五蔵へと病が進行する場合も含まれる（S10「過在足少陽厥陰，甚則入肝」）。なお、後に隋末の『諸病源候論』で腎の病として認識されるための規定が初出するが、ここではいまだ主要な認識ではない。②病因は、すべてに示されるわけではないが、傷寒による熱病（S31，S32，L23）、厥病（S22，S28，S45，L24）、精脱（L30）、刺鍼の過誤（S52）の4つに分けられる。③治療部位は、経脈のほか、耳の周辺部（L24：耳中，S63：耳前，S52：客主人，L21：天牖，L75：聴宮）と手の特定の部位（S63：手陽明之絡の病—手大指次指爪甲上去端如韭葉・中指爪甲上与肉交者，L24：手小指次指爪甲上与肉交者）が挙げられる。

## 【『明堂』（孔穴主治条文のみを対象とし『素問』『靈枢』との対応箇所は除外）】

『甲乙経』巻七・六経受病発傷寒熱病第一中（天牖）、第一下（6条6穴。少沢。陽谷。後谿。竅陰。俠谿。束骨）、巻十一・陽厥大驚発狂癰第二（1条2穴。膈俞。偏歴）、巻十二・手太陽少陽脈動発耳病第五（14条20穴。上関。下関。陽経。関衝。液門。陽谷。耳門。聴会。聴宮。翳風。会宗。天窓。天容。肩貞。腕骨。商陽。合谷。中渚。外関。四渎）の4篇に見え、孔穴主治条文は22条、穴は凡そ29穴（陽谷の重複を含む）である。①病の深さや②病因は、主治条文には示されないが、篇名や前後の主治證からある程度推定できる。病の深さについては、五蔵という観点は無い。なお、巻十二・第五は、『靈枢』経脈の影響を受けての篇名である。③治療部位には、穴という観点が明確に加わる。部位別に分けると手15穴（手陽明4穴、手少陽6穴、手太陽5穴）、足3穴（足少陽2穴、足太陽1穴）、耳前6穴（足陽明1穴、手少陽4穴、不明1穴）、頸3穴（手少陽2穴、手太陽1穴）、肩1穴（手太陽）、背1穴（不明）と手が最も多い。なお、患部に近い耳前・頸・肩が合わせて11穴であるのに対し、経脈と関わりの深い手足が18穴と多く、経脈への意識が高いことがうかがわれる。各部の経脈分布は、陰陽では陽脈のみであり、手足では手が多く、『陰陽』や『脈書』で耳脈と称された手少陽脈が最多であり、『素問』『靈枢』とは傾向が異なる。

【結論】後漢代の認識は、『足臂』などにはじまる経脈の病という観念の敷衍であった。